



『マクヒュー／スラヴニー 現代精神医学』

ポール・マクヒュー，フィリップ・スラヴニー／著  
澤 明／監訳

みすず書房

- A5判・440頁
- 2019年6月発行
- 定価（本体7,200円+税）

**精** 神科医として白衣を脱ぎ棄てて久しい私が、本書の書評の依頼を受けた時には、少々たじろいだ。かなりの読み応えのある精神医学書だからである。微力ながらも引き受けた理由は、この大作に対して、精神科医経験のある基礎神経科学者としての視点で、『実験医学』の読者に紹介する意義を感じたからである。脳の世紀と言われ、最先端の基礎研究者たちが続々と精神疾患研究に参入しているご時世である。このこと自体は喜ばしいことであるが、「精神疾患は捉えどころがない」「モデル動物でヒトの高次脳機能を外挿することなどできるのか？」という悲観的な展望から、疾患関連遺伝子の遺伝子組換えマウスでプレパルス抑制が障害されたから統合失調症マウスを確立した、というような過度に単純化した主張まで渦巻き、なぜ精神医学というのはこれほど困難な学問になってしまったのか？と私自身も途方に暮れていたからである。本書によれば、精神医学の混沌の原因は、「なぜ物質が心を紡ぎ出すことができるのか？」という「心脳問題」に対して神経科学がいまだに非力であること、そして第2の理由が「派閥争い」であると断じている。そして、「心脳問題」を回避し、「派閥争い」を生産的に統合するために、精神疾患を4つの観点から理解することを本書は提案している。疾患の観点、特質の観点、行動の観点、生活史の観点である。

「疾患」の観点は、患者がどのような疾患を持っているかである。例えば統合失調症に罹患しており、ドーパミン拮抗薬で陽性症状が良好に回復するなど、生物学的な視点である。「特性」の観点は、個々の人がそれぞれもつ精神の特徴である。身体的に背が高い人から低い人がいるように、精神に関しても、知性が高い人もいれば低い人もいる、もともと陽気な人もいれば悲観的な人も

いるなどと言った精神の個性を心理学的に説明しようという試みである。例えば、IQ検査において低い水準にある人々は、人生に適応しようとする際に、学習が遅かったり、抽象的理論づけに困難があったり、それゆえに社会的に失敗したり搾取を受けやすく、ストレスへの脆弱性も高くなるだろう。「行動」の観点は、患者がどんな「疾患」や「特性」をもっているかではなく、彼らが「何をしているか」という観点である。行動は、動物にとって非常に重要で際立った特徴をなしており、実際に多くの自然科学者はさまざまな種の行動を観察し、如何に行動によって動物が適応していくか観察することにキャリアを重ねてきた。ダーウィンなどその元祖であろうし、後にパブロフやスキナーらにより、行動が環境に反応し、動機付けされ、そして学習により形成されるという行動主義へ発展していく。「疾患」の観点が、患者が「もっているもの」を治療するのに対して、「行動」の観点は、患者が「していること」を止めようとするのであって、治療方針は異なってくる。例えばアルコール依存症では、抗酒薬によりアルコール行動に罰則を生じするような状況をつくり出し、集団療法に参加を促し、飲酒欲求に屈さないための多くの合理化規制、例えば仲間意識などの人的つながりという報酬や、禁酒による健康回復などの報酬という側面に本人の注意を向けさせる。第4の切り口は、「生活史」の観点である。精神科における診断は患者が語る物語（背景→因果関係→結果）を解釈することだが、これらの因果関係は客観的にしめされない推論の域をでないという意味で科学ではない。しかし、精神科医はこの方法により科学では明らかにできない人生の側面を正しく理解でき、精神療法という形で昇華させ、患者の現在そして未来を変えてきた。

『実験医学』の読者の多くは、基礎研究者であろうか



ら、このように全く異なる4つの観点から患者を理解することに何の優位性があるのか?と訝るかもしれない。しかし、本書の痛快な点は、それぞれの有用性と限界を明確に対比させたことにある。実験を生業としているものにとって、各手法の長短を生かして最適解を選んでいくことは科学として当たり前である。一方で、精神医学は異なる派閥による熾烈な戦いの歴史であった。例えば精神分析で著名なフロイトは、患者の供述に着目し、統合失調症などの妄想の説明も患者の性的な葛藤として理解した。統合失調症に独特の妄想体験の形式や、この疾患がもつ進行性の悪化を議論せず、もっぱら患者の「特性」や「生活史」に主眼を置き、生物学的な視点、すなわち「疾患」の概念を入れないことは明らかに弊害である。逆に、神経性無食欲症を「疾患」と括っただけでは患者の理解や治療にはつながらず、患者の「特性」を理解したうえで、「行動」形式を観察し、「生活史」に寄り

添った精神療法が必要である一方、薬物療法だけを行う精神科医がいることも事実である。すなわち、4つの観点から多角的に最適解を見出すという優位性を本書は提案しており、そうすることによりヒト高次脳機能という難解な現象を理解しようという試みである。基礎研究者にとっては、少々手ごわい本かもしれないが、精神疾患を本当に理解したい、もしくはプレパルス抑制の障害で統合失調症マウスというようなスローガンに疑問を感じている基礎研究者にはぜひ読んでいただきたい。なぜ、精神医学がこれほど難解であるかを、そしてどのようにこの学問を進めるべきかを真に思索する端緒になることは間違いない。

林(高木) 朗子 (理化学研究所・脳神経科学研究センター・  
多階層精神疾患研究チーム)